

MATERIALS & CHEMISTRY

国立研究開発法人 産業技術総合研究所
材料・化学領域

〒305-8560 茨城県つくば市梅園1-1-1 中央事業所つくば本部・情報技術共同研究棟
mc-liaison-ml@aist.go.jp



● 材料・化学領域 ウェブサイト

https://www.aist.go.jp/aist_j/researcher/aboutus/dep_dmc.html

領域長ご挨拶

材料・化学領域には、約650名の研究者・技術者が集い、材料と化学の力を融合させることで新しいイノベーションを生み出しています。私たちは、産総研と株式会社AIST Solutionsが一体となった「産総研グループ」として活動しており、研究開発から社会実装までを力強く推進しています。令和7年度から始まった第6期中長期計画(7年間)では、「サーキュラーエコノミー社会実現に必要な資源循環・サプライチェーン強靱化」を大きな目標に掲げています。

この実現に向けて、エネルギー・環境・資源制約への対応、マテリアルDXの推進、そして将来の社会実装につながる先端的技術シーズの創出を3つの柱として据え、研究開発を戦略的に進めています。資源循環利用技術や未利用資源利活用技術の発展を通じて、循環的な資源利用を基盤とするサーキュラーエコノミーの推進に貢献するとともに、MPIプラットフォームを活用したMI/PIの推進や高度材料AI、自動自律実験などを駆使したマテリアルDXによって、データとAIに基づく新しい材料開発のかたちを切り拓きます。さらに、機能性化学品や機能性材料の研究を進め、将来の新産業や社会課題解決につながるイノベーションの種を育てていきます。また、海外の公的研究機関との連携を深め、国際的な共同研究や国際標準化活動を積極的に展開します。国内では、産総研が全国に展開する12拠点のうち、材料・化学領域はつくばセンターに加え、東北・中部・関西・中国の各センターに研究拠点を置き、地域と連携したイノベーション創出にも力を注いでいます。

さらに、将来顕在化する課題を先取りしつつ、企業の皆さまが抱えるニーズに迅速に応える体制を整え、産総研グループとして社会実装を加速する研究開発を進めてまいります。持続可能で豊かな社会の未来像を、素材・化学産業の皆さまとともに描き、その実現に向けた挑戦を続けていければ幸いです。どうぞよろしくご挨拶申し上げます。



領域長
遠藤 明

材料・化学領域のMission

材料・化学領域では、「サーキュラーエコノミー社会実現に必要な資源循環・サプライチェーン強靱化」に資する技術開発・社会実装を推進し、革新的イノベーションを永続的に創出するエコシステムの構築を目指します。

01 エネルギー・環境・資源制約への対応

- 資源循環利用技術
- 未利用資源利活用技術

02 マテリアルDXの推進(データ駆動型材料開発など)

- MI/PIの推進(MPIプラットフォーム)
- 高度材料AI(マルチモーダルAI)
- 自動自律実験

03 将来の社会実装につながる先端的技術シーズの創出

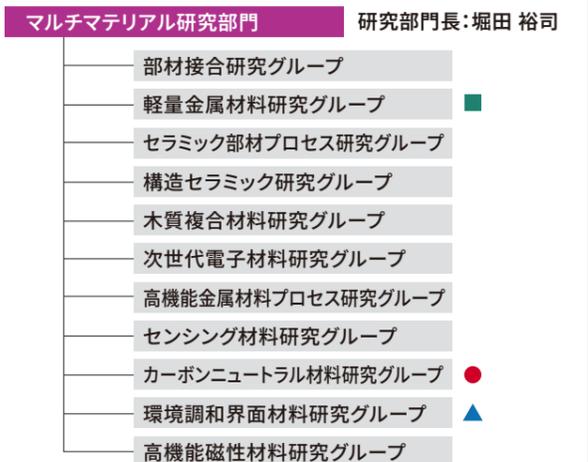
- 素材産業競争力の源泉となる機能性化学品
- 素材産業競争力の源泉となる機能性材料

| | | | | | |
|--------|--------------------|------------|------|-----------|-----|
| 研究職 | 314名 ^{※1} | 産総研特別研究員 | 21名 | シニアスタッフ | 11名 |
| キャリア職員 | 11名 | テクニカルスタッフ | 220名 | クレリカルスタッフ | 25名 |
| 招へい研究員 | 23名 | リサーチアシスタント | 20名 | | |

※1 実装研究センターを主務とする領域所属研究職 37名を含む

材料・化学領域を主務とする職員数 計645名 (2025年4月17日時点)

材料・化学領域組織図



実装研究センターを主務とする研究職員が所属しているグループ

- CCUS実装研究センター
- サークュラーテクノロジー実装研究センター
- ▲ レジリエントインフラ実装研究センター

食薬資源工学オープンイノベーションラボラトリー

バルカー・産総研先端機能材料開発連携研究ラボ

DIC・産総研サステナビリティマテリアル連携研究ラボ

日本特殊陶業・産総研カーボンニュートラル先進無機材料連携研究ラボ

日油・産総研スマート・グリーン・ケミカルズ連携研究ラボ

旭化成・産総研サステナブルポリマー連携研究ラボ

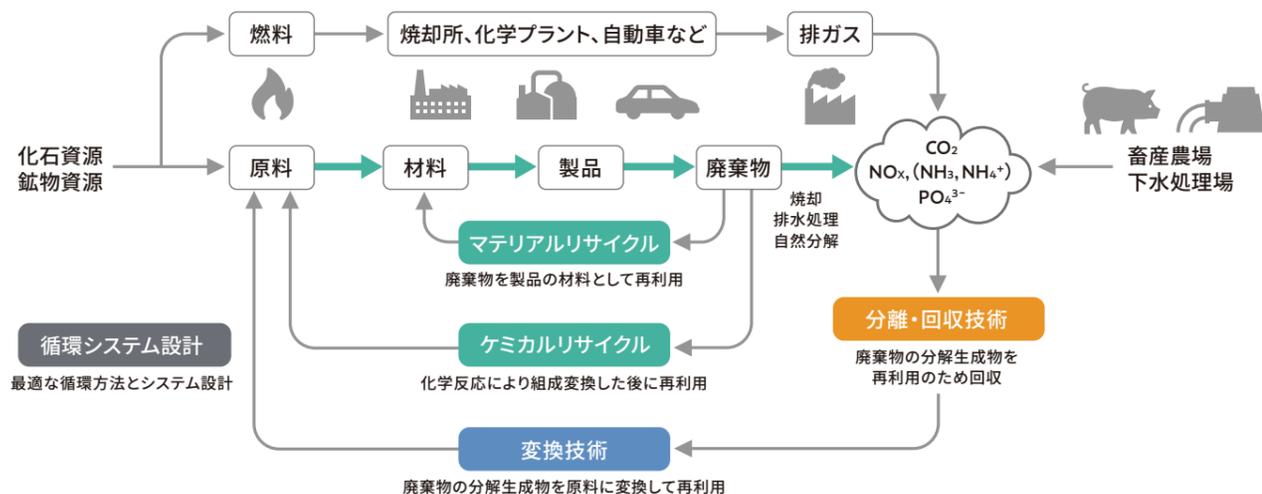
連携体制

金沢工大・産総研 先端複合材料ブリッジ・イノベーション・ラボラトリー

立命館・産総研 ライフセントリックデザインブリッジ・イノベーション・ラボラトリー

01 エネルギー・環境・資源制約への対応

資源消費型社会から脱却し資源循環型社会の実現を目指して、プラスチック・金属などの高度リサイクル技術の開発、それらの生産時・廃棄時に生じる二酸化炭素(CO₂)や窒素化合物、およびリン化合物などの回収・再資源化技術とその評価技術の研究開発に取り組んでいます。



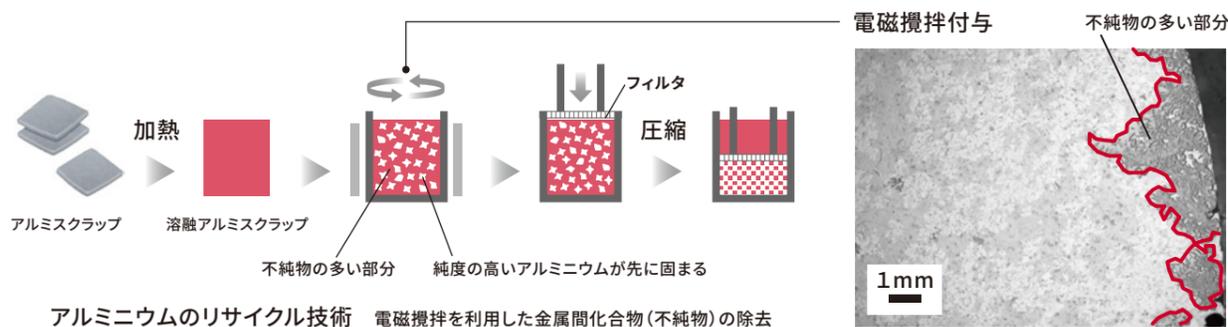
プラスチックリサイクル技術

廃プラスチックによる環境負荷を低減するためのリサイクル技術の開発が社会課題となっています。このため、種々の縮合系ポリマーについて、品質の低下なく何度でもリサイクル可能なケミカルリサイクルを、低環境負荷で実現する技術開発に取り組んでいます。また、廃プラスチックを製品の材料とするマテリアルリサイクルの実現を推進するための、材料診断技術・グレーディング技術の開発を進めています。



金属リサイクル技術

多様なスクラップから得られるリサイクルアルミニウムは、素材に含まれている不純物の影響により、主に鋳造材として利用されてきました。これらを需要が急増している展伸材に利用していくために必要となる不純物除去技術を開発することで、軽金属材料の資源循環システムの構築に貢献していきます。



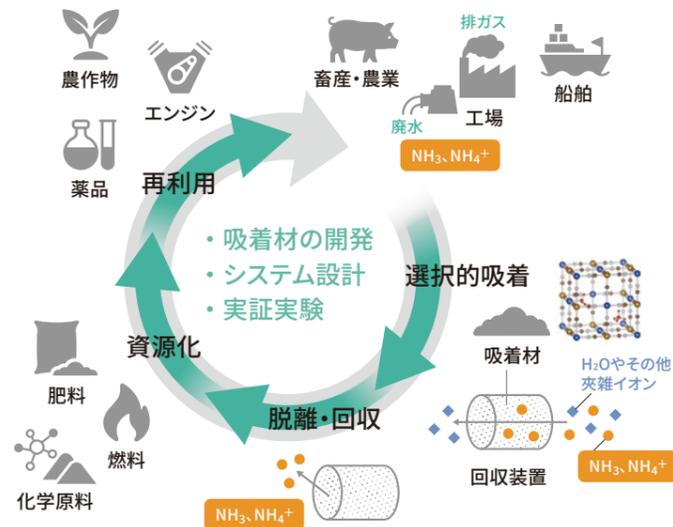
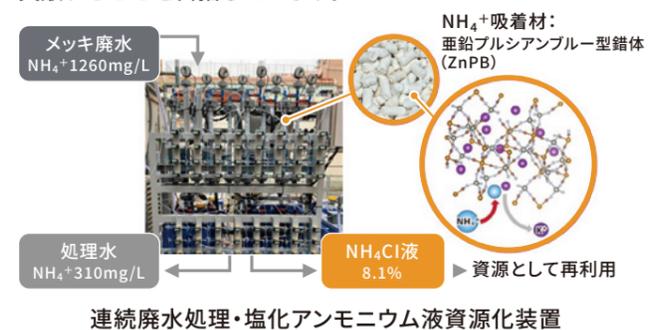
CO₂分離・回収・変換技術

炭素循環に関わる技術の社会実装化に向けて、CO₂分離回収・資源化コンソーシアム(CO₂コンソ)を運営するとともに、産業排ガスや大気からのCO₂の分離・回収技術、CO₂を有用な素材へ変換する技術、および経済性と排出量削減を両立する炭素循環システムの設計技術の開発を進めています。



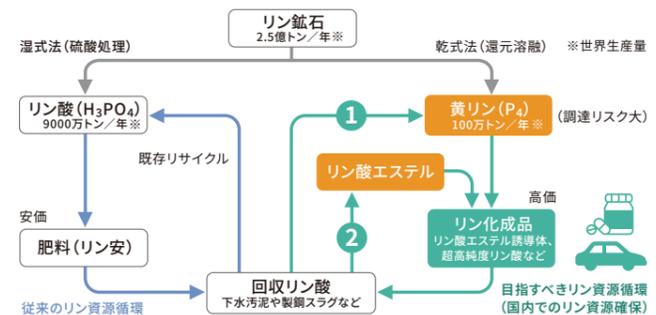
窒素資源循環技術

産業・生活活動で発生する排ガスや廃水に含まれている窒素化合物、特にアンモニア態窒素は、悪臭・富栄養化などの環境汚染を引き起こします。高選択性・高吸着容量をもつ吸着材の開発により、アンモニア回収と再資源化に取り組み、窒素循環型社会へ貢献することを目指しています。

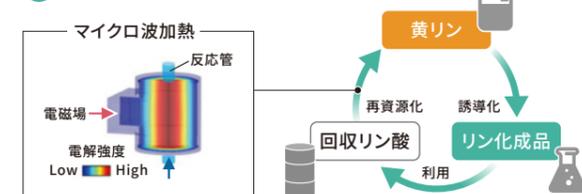


リン資源循環技術

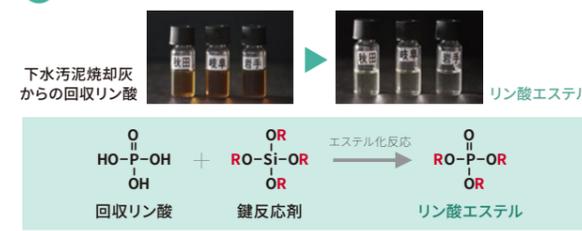
日本はリン資源のほぼ全量を輸入に依存しており、国内での新たなリン資源確保は重要な社会課題です。この課題解決に向けて、黄リンやリン酸エステルを、回収リン酸から直接合成する技術開発を進めています。



1 黄リンをリン酸から合成する技術

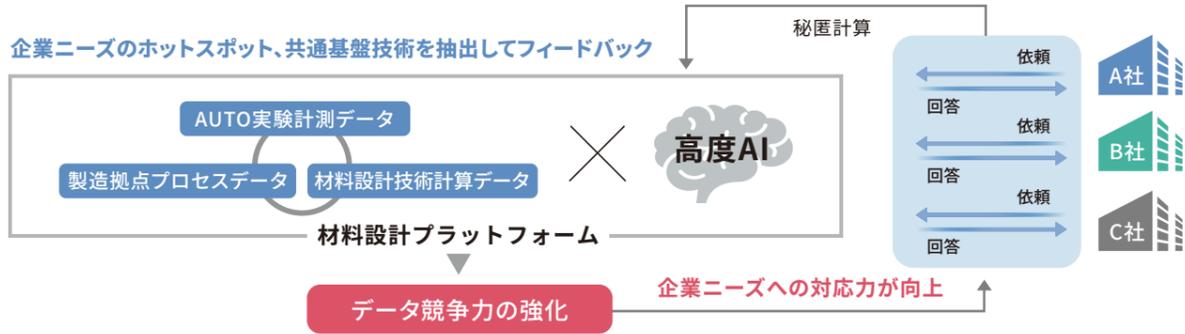


2 リン酸エステルをリン酸から合成する技術



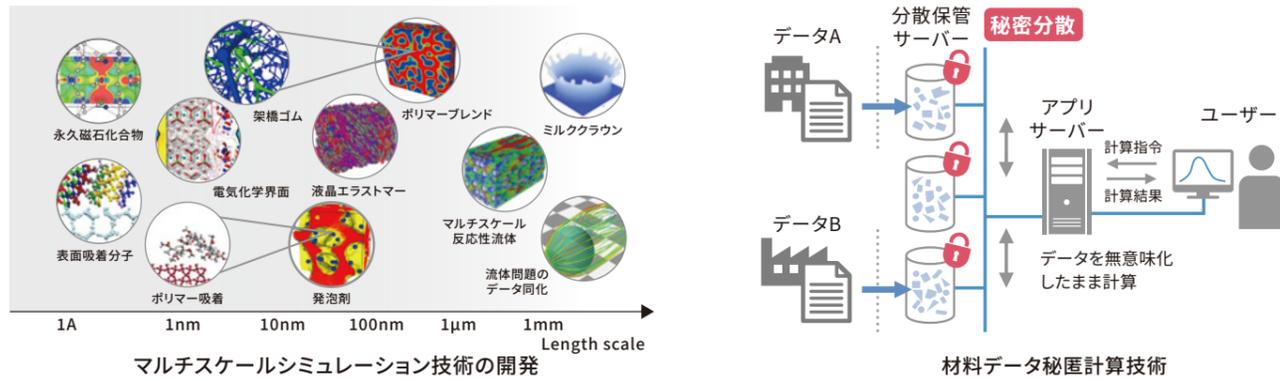
02 マテリアル DX の推進 (データ駆動型材料開発など)

次世代の社会を支える革新マテリアルの開発において、計算科学、実験、AIを高度に融合した材料設計・製造のための基盤技術を開発し、それらをプラットフォームに集約することにより、マテリアル革新力の強化に貢献します。



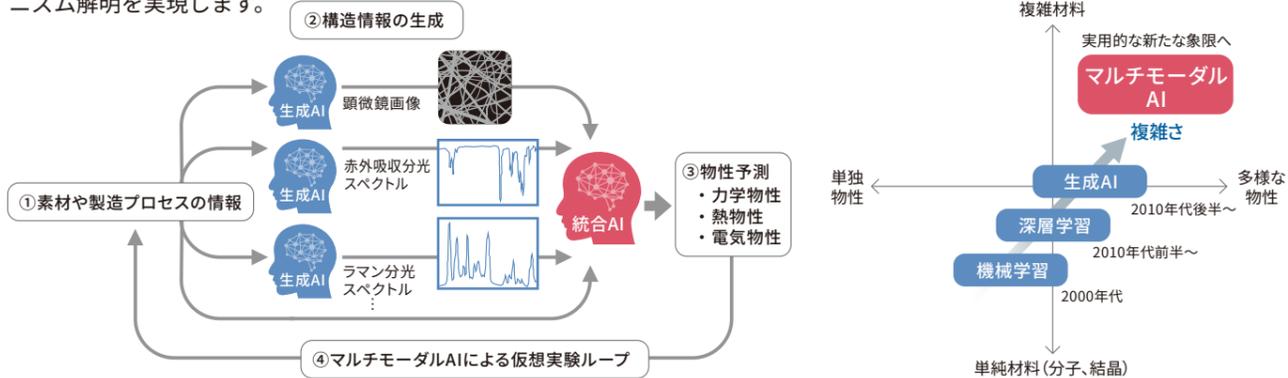
材料設計 & 秘匿計算技術

第一原理計算、量子化学、分子動力学法、連続体シミュレーションなどの計算科学的手法や、AI、量子計算を活用した材料設計の基盤技術を高度化し、良質なマテリアルデータを創出・活用する研究開発を進めています。また、企業を持つ重要な材料データなどを「共有せずに共用できる」ようにするための材料データ秘匿計算の社会実装について開発を行っています。



高度材料AI

画像やスペクトルなど多種多様なデータ形式の材料情報・プロセス情報を同時に処理・解析したり、生成AI技術を活用したりすることにより、複雑な材料のさまざまな機能を予測する技術(マルチモーダルAI)を開発しています。これにより、高度な認識やメカニズム解明を実現します。

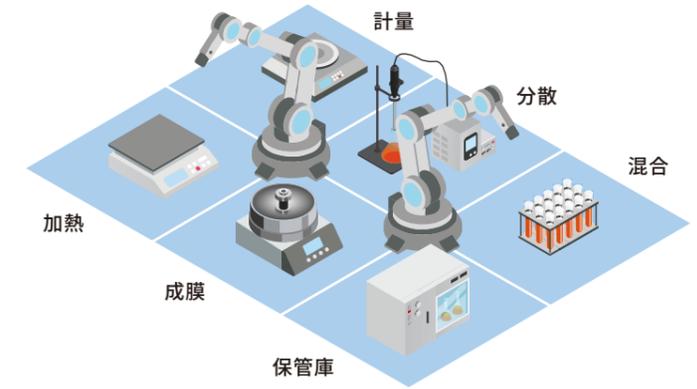


AUTO実験工房

自動自律実験を推進する「AUTO実験工房」を立ち上げて研究の変革を進めています。研究の分野を問わず広く活用できる実験システムの構築を目指し、自動化モジュールの開発と水平展開のプラットフォームを構築して、自動化の導入コストや技術的負担を軽減するとともに、人材育成、データ活用と共通化のオープンイノベーションを推進しています。



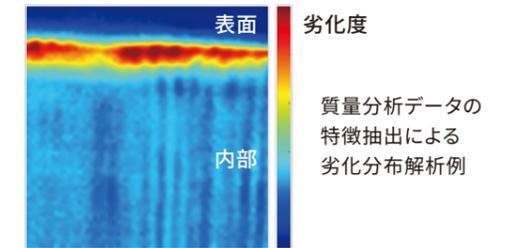
協働ロボットによる自動実験技術の開発と展開



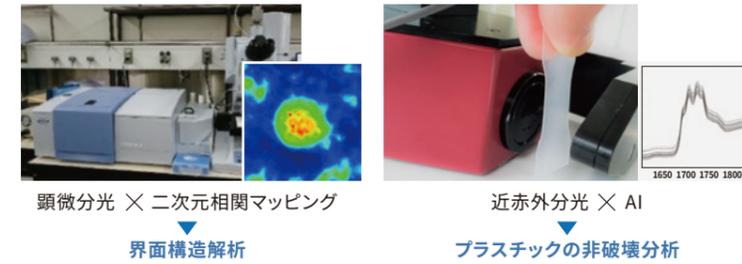
材料診断技術

材料の機能や品質に関わる構造情報を捉える計測技術と、データから重要な情報を抽出するインフォマティクスを組み合わせ、材料診断インフォマティクス技術を開発しています。

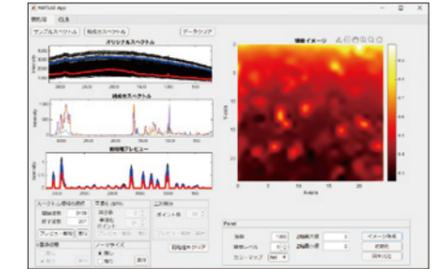
また、専門知識を必要とせずにデータ解析を行うためのアプリの開発と公開を行い、材料診断に関わる技術の普及を進めています。



情報を抽出するインフォマティクス技術



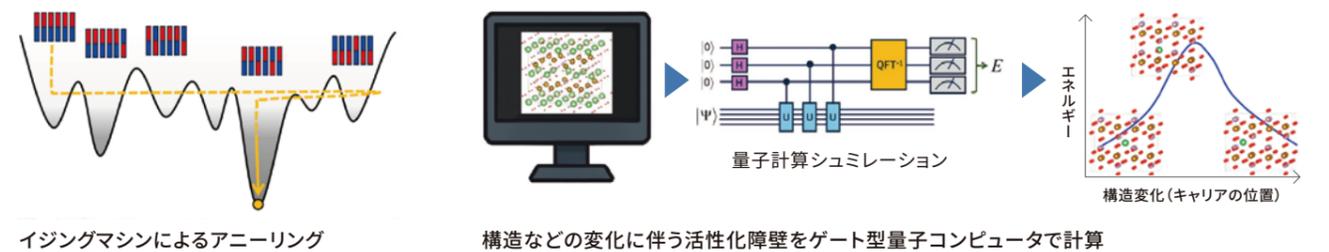
構造情報を捉える計測技術



社会実装に向けた材料診断アプリの開発

量子計算機のマテリアル分野への展開

量子計算機では、従来の古典計算機において計算時間が膨大で解くことのできなかつた問題が、現実的計算時間で解ける可能性があります。材料・化学分野でのユースケース創出を目指した研究開発を進めています。

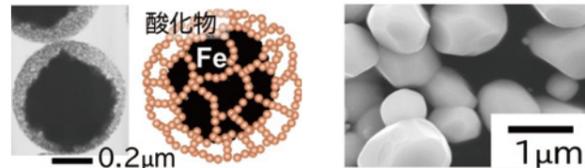


03 将来の社会実装につながる 先端的技術シーズの創出

将来の社会実装につながるような先端的な各種の機能性材料の開発や合成技術の開発を進めることで、企業の課題にソリューションを提供していきます。また、国際標準化などの基盤整備と併せて、我が国の素材・化学産業の国際競争力の維持・強化に貢献します。

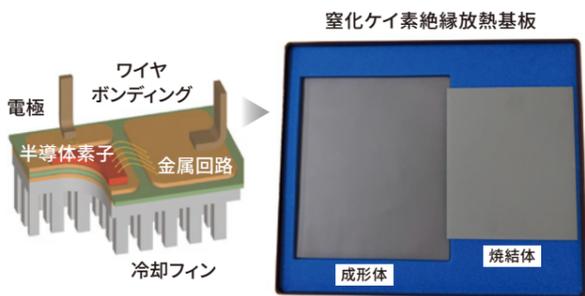
■ 高性能セラミックス、金属材料技術

界面状態や微細構造を制御することにより、さまざまな高性能材料を開発します。また、特性が異なる異種材料を適材適所に組み合わせるマルチマテリアルを開発することで、サーキュラーエコノミー社会実現への貢献、サプライチェーン強靱化に貢献していきます。

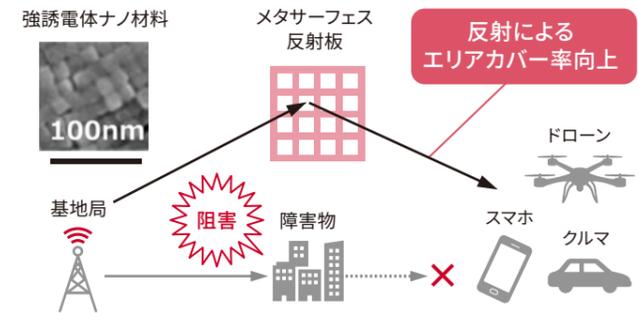


100MHz超まで超低損失 Fe系軟磁性粉末
3T超の超高保磁力 Sm-Fe-N永久磁石粉末

化学的手法による高性能磁性材料の開発



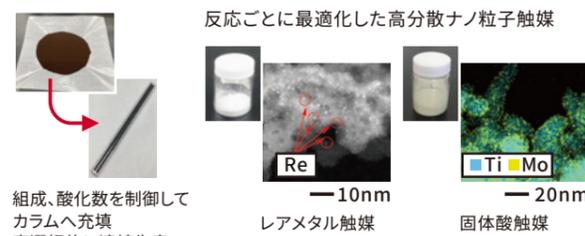
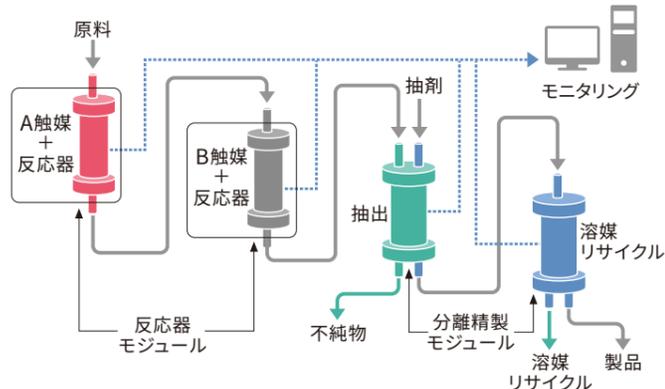
高熱伝導セラミックスによる電子デバイス用絶縁放熱基板



6G通信のエリアカバー実現に向けた
強誘電体ナノ材料による動的メタサーフェスの開発

■ 連続フロー精密生産技術

機能性化学品・材料を必要な量だけ、無駄なく、高速に合成できる連続フロー精密生産技術の開発を進めています。その実現に向けて、反応経路探索技術の開発と高性能な触媒の開発に取り組むと同時に、モジュール連結を可能とする連続反応器、連続抽出分離装置の開発に取り組んでいます。



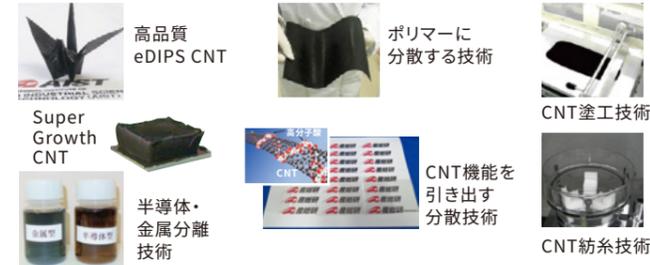
反応ごとに最適化した高分散ナノ粒子触媒
組成、酸化数を制御して
カラムへ充填
高選択的に連続生産
レアメタル触媒
固体酸触媒



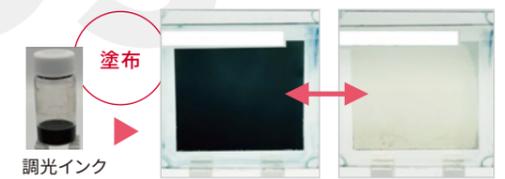
新規触媒と各種モジュールを組み合わせた
連続フロー精密生産システムの例

■ ナノ材料・ナノ組織化技術

革新的機能発現が期待されるナノ材料とその組織化技術、ナノカーボン材料のデバイス化技術の開発に取り組んでいます。これにより、素材、繊維、透明フィルム、複合材料、次世代電池への社会実装を目指します。



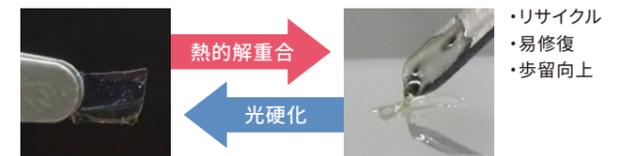
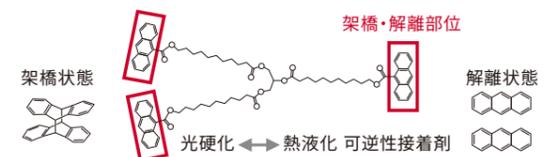
ナノカーボンの高度化のための合成・分散・成形加工技術の開発



乾電池以下の低電圧で自在調光でき、
遮熱性にも優れた全固体型調光デバイス

■ 接着・接合技術

広範な工業製品に使用されている接着・接合技術において、界面現象のメカニズム解明と接着の信頼性評価の担保が重要な課題となっています。このため、産学官との連携を図りながら、界面分析、表面処理法、新規接着剤、接合部の強度・信頼性評価、検査手法などの開発を進めています。また、接着接合の特性評価技術の国際標準化活動に取り組んでいます。



易解体接着剤

- ・リサイクル
- ・易修復
- ・歩留向上

■ 植物・バイオ由来資源の利用技術

植物・バイオ由来資源を利用した機能素材の開発に取り組んでいます。植物由来高分子のリグニンを白色化する独自の有機修飾技術により、高意匠性の膜や樹脂などへの用途開発を進めています。また、食品残渣・農業副産物を利用した材料、ナノセルロース複合材料、バイオサーファクタント(発酵技術で生産する界面活性剤)など各種材料の合成技術・利用技術を開発しています。



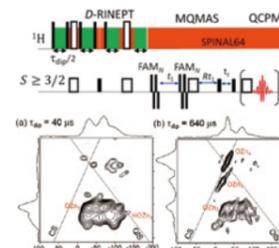
リグニン
白色リグニン
樹脂複合物
植物由来芳香族高分子「リグニン」を用いた素材開発

■ 材料開発を支える最先端計測技術

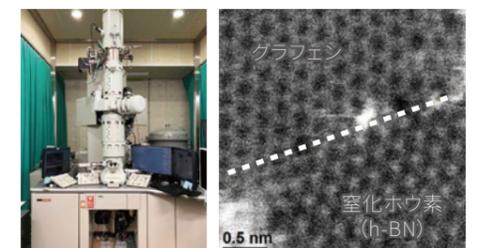
材料開発のための最先端計測機器とこれらを用いた分析手法に関する基盤技術の開発を進めています。



DNP-NMR(高感度固体用核磁気共鳴装置)



高感度核磁気共鳴による分析法の開発(新規パルス系列とZnOの二次元表面分析)



低加速電圧走査型透過電子顕微鏡による
グラフェン・窒化ホウ素(h-BN)面内ヘテロ接合の観察

オープンイノベーション拠点

新規材料の革新的創生に向けて

新規材料を創生するにあたり、素材の選定に始まり、部材への加工そして製品の製造という工程が一般的です。素材の選定には材料予測から試作を行うマテリアルズ・インフォマティクス(MI)が用いられ、部材加工から製品には材料試作から製造をカバーするプロセス・インフォマティクス(PI)が重要となります。これらのインフォマティクスを効率的に組み合わせることによって、マテリアルイノベーションは実現されます。



MPI 先進触媒拠点 (つくばセンター)
MPI セラミクス・合金拠点 (中部センター)
MPI 有機・バイオ材料拠点 (中国センター)

● 企業の製造プロセスに関する課題解決を支援

全国3カ所の研究拠点到最先端の製造プロセス開発のプラットフォームを整備しました。機能性化学品・創薬、セラミクス・合金、有機・バイオ素材などについて、原料から部材に至るまでのプロセス全体を一貫通貫で開発、分析・評価設備と連動したプロセスデータの収集ができます。これらの製造プロセスデータを活用した「データ駆動型研究開発」を加速するための基盤(設備やネットワーク)を整備しています。

QRコード | MPIプラットフォーム窓口
E-mail: M-MPI-ml@aist.go.jp
URL: https://unit.aist.go.jp/dmc/platform/MPI/index.html



NEPP (東北センター)

◆ 企業の材料開発・試験・解析のニーズに対応

東北センターに整備されたNEPPは、ナノマテリアルをはじめとするゼオライト、プラスチックなどの材料関連企業を対象に、材料の試作・評価を支援する拠点です。この拠点には、材料設計、成形加工、ナノ構造評価、成分・物性分析、ガスバリア性評価など、材料開発の各フェーズに対応可能な装置群が整備されており、幅広い技術支援を行うことができます。

QRコード | NEPP窓口
E-mail: M-nepp-tohoku-ml@aist.go.jp
URL: https://unit.aist.go.jp/tohoku/nepp/

◆ ナノマテリアル試作・評価プラットフォーム(東北)

材料の設計・試作、分析・評価など、企業の製品開発のニーズに応じて、設計・試作・最適化まで一貫して行う材料開発拠点

● 有機・バイオ材料拠点(中国)

有機・バイオ材料の各種原料の調製から成形加工までの一貫通貫のプロセス開発

● 先進触媒拠点(つくば)

機能性化学品や創薬開発などで重要な高性能触媒開発および触媒反応プロセス開発

● セラミクス・合金拠点(中部)

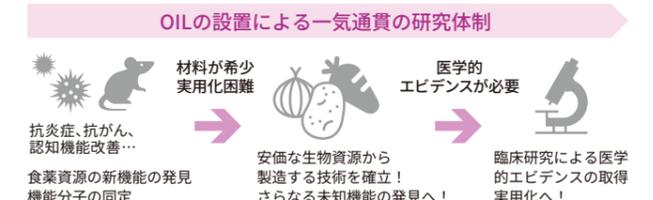
セラミクスや合金などについて、原料となる粉体合成から部材に至るまでの一貫通貫のプロセス開発

オープンイノベーションラボラトリ (OIL)

大学などの基礎研究と産総研の目的基礎研究・応用技術開発を融合し、産業界への技術の「橋渡し」を推進するために、大学などのキャンパス内に設置した連携研究拠点です。



● 食薬資源工学OIL



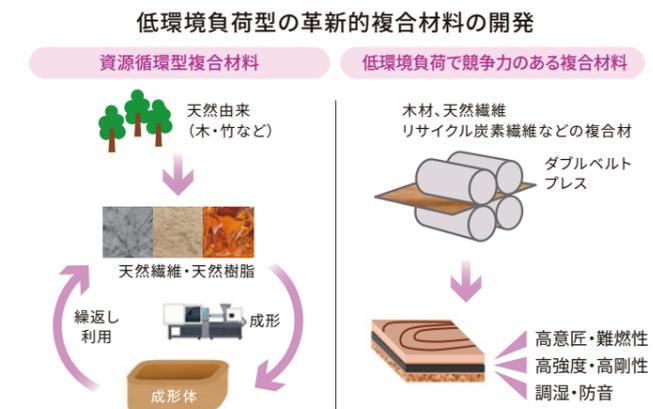
ブリッジ・イノベーション・ラボラトリ (BIL)

企業ニーズを核として、産総研と地域大学等が持つ研究シーズを用いた共同研究などを実施する連携体制です。



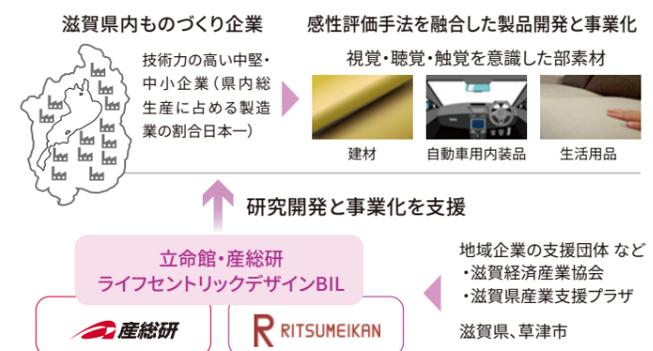
● 金沢工大・産総研 先端複合材料 BIL

両者が持つ材料開発の強みをいかし、カーボンニュートラルに向けた天然素材/資源循環型複合材料の研究開発を行います。



● 立命館・産総研 ライフセントリックデザイン BIL

「こちよさ」を新たな付加価値とした滋賀県内企業のものづくりの支援を目指します。



連携研究室（冠ラボ）

企業の戦略に沿った研究開発を実施するために、その企業をパートナー企業とよび、産総研の中に企業名を冠した通称「冠ラボ」を設置しています。パートナー企業は研究者・研究資金などを、産総研は研究者・研究設備・知的財産などの研究資源を提供し、企業からの出向研究者と産総研の研究者が共同で研究開発に取り組んでいます。

バルカー × 産総研

● 先端機能材料開発連携研究ラボ



- ・シール製品、シールエンジニアリングサービス
- ・フッ素樹脂など機能樹脂加工技術

- ・分光分析、質量分析などの高度分析/評価技術
- ・センシング/診断技術

高品質な製品および顧客視点のサービスによる価値創造

DIC × 産総研

● サステナビリティマテリアル連携研究ラボ



- ・有機分子設計技術
- ・高分子設計技術
- ・光学・色彩技術
- ・応用評価技術

- ・触媒化学技術
- ・バイオ材料創出技術
- ・生分解性ポリマー技術
- ・評価、解析技術

天然由来原料などからサステナブルマテリアル創出を具現化し環境負荷を低減する循環型社会を実現

日本特殊陶業 × 産総研

● カーボンニュートラル先進無機材料連携研究ラボ



- ・自動車部品技術
- ・粉体/粉末冶金技術
- ・磁性材料

- ・国内最先端の機能性材料開発技術やDXによる材料開発技術
- ・モビリティ電動化などカーボンニュートラルに貢献する幅広い技術シーズ
- ・データ駆動型材料開発

「環境・エネルギー」や「モビリティ」の分野において、カーボンニュートラルに関わる先進材料の開発を推進

日油 × 産総研

● スマート・グリーン・ケミカルズ連携研究ラボ



- サステナビリティの実現
- ・石油系原料からバイオマスなどの低環境負荷な原材料への転換
- ・省エネルギー、省資源の環境調和型製造プロセスの確立

- 材料の総合知の活用
- ・最先端の触媒創製技術やDXによる材料開発に高いポテンシャル
- ・バイオものづくり、材料診断に関わる国内最先端の設備を有する開発拠点

脱炭素&生活の豊かさに応えるグリーン・ケミカルズの創出

旭化成 × 産総研

● サステナブルポリマー連携研究ラボ



- 総合化学メーカーならではのポリマーに関する技術・知見
- ・分析/解析技術
- ・触媒/プロセス技術
- ・多様な用途開発力

- 材料の総合知の活用
- ・材料診断、ケミカルリサイクル技術
- ・接着解析/評価技術
- ・産官学との連携ネットワーク

サステナブルポリマーの提供を可能にする社会システムの実現

産総研コンソーシアム

産総研コンソーシアムとは、産総研の業務にかかる産学官連携の支援、成果の利用の促進、情報の収集および提供などのため、産総研が運営するテーマ別の研究会です。なお活動に要する経費は、企業・大学などの会員皆様に負担いただいております。2025年4月時点で、材料・化学領域で設立したものが2組織、研究部門で設立したものが5組織あります。入会方法は、QRコードからのリンクをご覧ください。

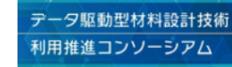


CO₂分離回収・資源化コンソーシアム

● 材料・化学領域 — つくばセンター



カーボンニュートラルの実現を目指し、個別企業が持つ技術の進化と新たなサプライチェーンの実現や企業間連携を生み出す機会を提供するため、2021年9月に設立されました。最新技術の情報交換と企業間連携を生み出す場として、業界全体の技術力向上に寄与していきます。



データ駆動型材料設計技術利用推進コンソーシアム

● 材料・化学領域 — つくばセンター



「経験と勘」に依存した材料開発からデータに基づく材料開発への変革を目指して、2022年4月1日に設立されました。「データ駆動型材料開発」への入り口としてご利用いただくとともに、マテリアルDXの活用を目指す企業・公的研究機関の皆様の情報交流の場として業界全体の技術力向上に貢献します。



持続性木質資源工業技術研究会

● マルチマテリアル研究部門 — 中部センター



フロー精密合成コンソーシアム

● 触媒化学研究部門 — つくばセンター



接着・接合技術コンソーシアム

● 材料基盤研究部門 — つくばセンター



生物資源と触媒技術に基づく食・薬・材創生コンソーシアム

● 触媒化学研究部門 — つくばセンター



ガラス物性測定コンソーシアム

● 材料基盤研究部門 — 関西センター



なのセルロース工房^{*}

● 機能化学研究部門 — 中国センター

^{*}コンソーシアムではありませんが、共同研究機関の情報交換・協業の場として設立されました。



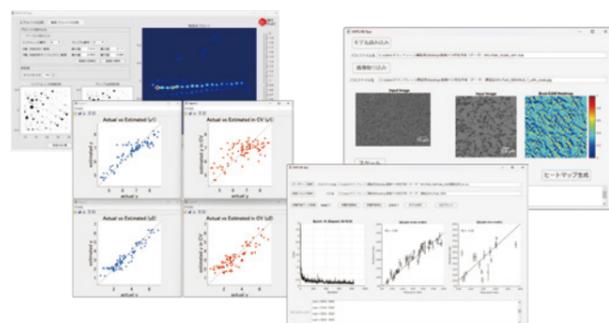
社会実装への挑戦 ～産総研とAISolの連携～

材料・化学領域では、研究成果を社会へ橋渡しするために、株式会社AIST Solutions (AISol) と協力し、企業の皆様との多様な連携を進めています。ここでは、マテリアルDX、サーキュラーエコノミー、iFactory、JEC³M (CO₂分離回収) といった社会実装に向けた代表的な取り組みを紹介します。

材料開発を加速する総合知の提供

産総研内に整備されたマテリアル・プロセスイノベーション拠点や地域イノベーション創出連携拠点などでは、インフォマティクスやAIなどデジタル技術を活用した材料開発DXに取り組み、設計から製造プロセスまで幅広い企業連携を進めています。

ここでは、AISolと連携のもと、材料開発DXの導入を容易にするデジタルプラットフォームの開発や、初心者でも使える各種アプリの公開を進めています。また、これらのツールを使いこなすデータ駆動型の開発を担う人材に向けた育成講座も開設しています。



材料解析技術の社会実装に向けたアプリの公開



次世代材料開発のプラットフォームの提供

材料開発DXプラットフォーム



マテリアルDX × デジタルプラットフォーム

サーキュラーエコノミー実現に向けた技術の社会実装

従来のリニアエコノミーからサーキュラーエコノミー (CE) への移行は、単独の企業や研究機関だけでは実現できない大きな社会構造の転換です。産総研グループは、技術を育てて社会につなぐ橋渡し役を担い、社会・業界・地域を巻き込んだエコシステムの構築を目指しています。数多くの課題の中でも、プラスチック資源の循環は特に喫緊のテーマです。PETは繊維やフィルムなど多様な素材との複合製品として流通しており、PETボトルに適用されているようなマテリアルリサイクルでは再利用が困難でした。

材料・化学領域では、室温レベルでPET樹脂を分解し、原料であるテレフタル酸ジメチルを高収率かつ高純度で回収できるケミカルリサイクル技術を確立しました。この成果を基盤に、AISolが事業化を担い、ベンチスケールからパイロット、さらに商用プラントへとスケールアップを進めるとともに、資源循環エコシステムの形成に向けた事業展開に挑戦しています。

CEへの移行へ - 産総研グループの取り組み -



サーキュラーエコノミー

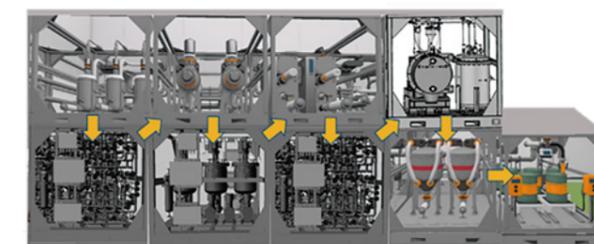


医薬品の連続精密生産とiFactory

機能性化学品の生産にあたって、これまでは原料を一度に投入するバッチ方式により化学製品を生産することが主流でした。原料を連続的に投入する連続生産に切り替えると、必要な量だけ生産するオンデマンド生産が可能となり、コンパクトな設備で、廃棄物排出量も削減されます。産総研グループでは、AISol スタートアップ認定を受けている株式会社iFactoryとともに、連続生産技術の普及に取り組んでいます。右図は、実験室スケールで有機合成反応の後工程の連続化が可能な後段プロセスのICM (Integrated Continuous Manufacturing) モジュールです。機能性化学品の反応工程を連結することで、反応から精製まで完全に連続化することが可能となります。



抽出洗浄 濃縮 晶析 ろ過 湿体率>10%



サージ 工程間の緩衝 サージ サージ 流動層乾燥 湿体率<2% 充填

有機合成反応の後工程の連続化モジュール

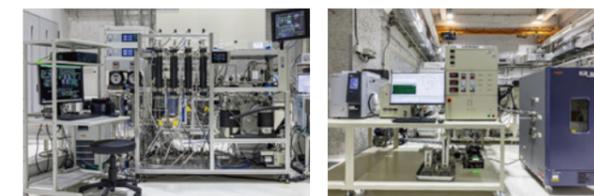
連携事例 企業インタビュー



マテリアルDX

CO₂分離素材の評価サービスの提供

CO₂分離素材を評価できるサービスを産総研グループで提供しています。産総研では、カーボンニュートラル社会の実現に向けて、燃烧排ガス、産業排ガス、大気などからCO₂を分離回収する技術の開発と実証にむけて、CO₂分離素材の信頼性の高い性能評価手法を開発してきました。本サービスでは、新規素材 (吸収液、吸着剤、分離膜) の分離素材特性、CO₂分離性能、耐久性、コスト・エネルギー消費量に関する客観的で信頼性の高い評価を提供し、CO₂分離回収技術の実用化を加速させます。



CO₂分離性能評価装置 (左: 吸着法、右: 膜分離法)



耐久性評価装置 (左: 吸着法、右: 膜分離法)



Japan Evaluation Center for CO₂ Capture Materials

連携のお問い合わせ

コンセプト共創から研究開発の実施、成果の権利化やスタートアップ事業創出に至るまで、企業の皆様のご要望や課題に応じた多数の連携メニューを取り揃え、さまざまなステージで皆様のビジネスを一気通貫で支援します。

